

## 序章 SFの前史とそのノイズ

宇宙人と聞いたとき、私たちがつい思い浮かべてしまう恐ろしい侵略者としてのイメージは、実はそれほど昔からあるものではない。とりあえず欧米の文脈で考える限り、一九世紀までの想像力が知っていたのは、とりたてて友好的でも好戦的でもない、だがしばしば地球の人類よりも優れた知性や徳性を備えた、異国の人々としての異星人である。第一章で確認するとおり、異星人を語ることは科学的な問題であるより以前に思想的な、あるいは神学的な問題だった。他方、一九世紀（少なくともその後半）には形を整えつつあったように見える、ジュール・ヴェルヌに代表されるような科学小説は、異星人については意外なほど寡黙である。なぜだろうか。もちろん

ん実際に知られていないものを想像するのが困難なのは当然ともいえるが、ならばそれはある時期以降、なぜ可能になったのかという反対の問いを問うこともできる。侵略者としての宇宙人というイメージが本格的に登場するのは一八九七年刊行のH・G・ウェルズ『宇宙戦争』からだというのが通念になっているが、なぜそれが世紀の変わり目の時期に可能になったか、逆にいえばなぜそれまでは不可能だったかという問いは、正当なものに違いない。

こういった疑問は私たちを、SF的な宇宙人像の前史をひもとくように誘<sup>いそ</sup>う。たしかにそれは考古学のないし系譜学的な関心を引く問題であり、第一章ではやや駆け足ながら一九世紀的な異星人表象の歴史を一瞥してみようと思う。だがこの試論の主題はそれとは別のところにある。神学的な問題系やユートピアの投影を離れた異星人表象を作り出そうとすると、一九世紀の文学的想像力はなぜか不能状態に陥ってしまうのだが、他方この時期、二〇世紀以降の視線からしても不思議に現代的なものに見える異星人表象も作り出されていた。現代的というのも曖昧な表現ではあるが、その時代には不可能だったはずのイメージが、歴史的な文脈を無視して生み出されてしまったかのような印象を、いくつかのテクストは与える。いわばそれらはSF前史のノイズなのである。火星や金星に「人間」が居住しているとすればそれはどんな人々であるのかと、誰もが頭を悩ませ、間接的ではかありえないさまざまな根拠から少しでも蓋然性の高い結論を引き出そうとしている傍らで、そんな議論など端から問題でもないというかのように、ほかの天体の住人について思うがままに語ってしまう想像力。それはいかなる意味でも一つの系譜を作ったり

はしていないのだが、奇妙な身軽さを共有しつつ、百年以上あとの読者の歴史感覚を混乱させるノイズとなる。ここで論じてみたいのは、その時代の重要な課題を知らないままであるかのような、この不思議な身軽さ以外何も共有してはいない、いくつかの例外的なケースである。

主役ではなく脇役、より正確に言えば同時代の舞台で役をもらうことのできなかつたような役者たちに、私たちはこだわってみよう。それには二重の意図がある。SFの歴史が主題でないとはいったものの、例外的な脇役たちを扱うことが、中心的な登場人物たちに別の角度から光を当てることが期待できないのではないだろう。科学の影響力が急速に高まり、かつそのことが純粋に希望でありえた一九世紀のヨーロッパにおいて、科学と文学的想像力の関係がいかなるものであったのか、ジュール・ヴェルヌやアルベール・ロビダの未来予測小説や、同時代の科学を意識した自然主義小説は教えてくれるが、異星人表象の特殊な事例は、こうした想像力の背負っていた歴史的な使命や宿命を、逆説的な形で浮き彫りにしてくれるのではないか。ましてやそれは「人間」という、近代の主題であった形象が、いかにあやうい土台のうえに乗せられていたかを示唆するテーマでもあるだろう。

だが他方、時代の要請から外れてしまった思考とはいったいどのようなものかという問い、例外的なもの考古学とでもいうべき問いもありうる。ここにはどこことなく、アウトサイダー・アートやアール・ブリュットと総称される現象に対する関心と、似たものがあるかもしれない。レーモン・クノーが試みた、いわゆる「文学狂人」探しもまた、これと隣接した作業だった。

その時代の文学者・芸術家・思想家たちが共有しているはずの前提を共有しないことによって可能になってしまう不思議にも自由な何か、それはどのようにして生まれるのかと、人はしばしば考える。たしかにここにはそれと接した問いがあるのだが、これから扱おうとする書き手たちは、決して時代の周縁にいたわけではない。アドルフ・ヴェルフリのように精神病者として拘束されていたのではなく、ヘンリー・ダーガーのように孤立した環境に置かれていたのでもない、だがなぜ同時代の課題とはかけ離れた場所で思考してしまったような精神。かといって、ほかの同時代人が思考できなかったことを思考することによって新しい時代を切り開いた、いわゆる「前衛」的なそれとも異なる精神。そうした精神が存在するように思えるのである。

たしかにこれはいかにも曖昧なカテゴライズだろう。時代に先んじていたことと時代から外れていたことを、明確な境界で区切ることなど不可能だ。たとえば最初に取り上げるシャルルマーニュ・イシール・ドゥフォントネーは、同時代が受け入れる素地をもたないような不可思議な異星人の物語を書き、ほとんど注目されることもなく、はるかのちに「発見」される。ではそれは、ロートレアモンが二〇世紀のはじめに「再発見」され、シュルレアリストたちによって偶像化されていったことと、どこまで異なっているだろうか。ドゥフォントネーの『カシオペアのΨ』<sup>メッセイ</sup>が、時代から孤立していたのか、時代に先駆けていたのかを決めることはできない。優れた感性をもつことと鈍感であることは、例外的であるという点で似通っているだけでなく、おそらく最終的には区別できないのである。ロートレアモンは同時代の視点からするなら、小ロマン派の残

響にすぎず、状況の変化があとから彼を先駆者に仕立てたのだという見方にも、一定以上の説得力があるはずだ。だがそうした事例に対し、どのような状況の変化が価値を与えなおすことになったかを説明しようとするのが文学史的・思想的なアプローチだとすると（しかもこのアプローチはたいいていの場合、作品の価値を切り下げようとするのではなく、作品それ自体が揺るぎない価値を内在させているという確信によって支えられている）、そもそもその当事者たちはなぜ時代の磁場を免れることができ、いかにその逸脱した思考を展開していったかを考えるという選択もありうる（だから私たちは、作品がいいか悪いかを問題にすることはないだろう）。たしかに多くのアウトサイダー・アーティストのように特異な状況に置かれていたわけではないにもかかわらず、別の思考を生み出し、周囲とのあいだで奇妙なすれ違いを演じてしまったような人々が存在したとして、そうなったことの理由を説明するのは難しい。それはある一人の作家だけが、同じような条件下にある人々のなかで、なぜ優れた作品を書くことができたかを、結局は説明できないのと同じである。だがその奇妙な思考が同時代といかにすれ違ったかを追跡することは、私たち自身が時代の磁場からふと自由になる瞬間の可能性を垣間見せてくれるのではなからうか。

たしかに例外的な思考を追跡することが目的であるなら、なにもテーマは宇宙人でなくてもいいかもしれない。だがとりわけ一九世紀を対象として、科学と文学の交点にあるテーマを選ぶことには、その時代の支配的な問題系を見定めやすいという利点がある。世界を主導するものとしての地位を科学によって急速に奪われていく文学・思想・宗教が、それにどのように抵抗しよう

としたかという物語が、ここでの議論の背景となるだろう。科学と文学の交差する地点で思考し、かつ創造しようとするならば、当然たどるべき道筋を、なぜか無造作に無視してしまったかのような書き手たちが、ここでの主題なのである。

さらに科学と文学の交点に位置するさまざまなテーマのなかでも、宇宙人という問題には、いまだに「正解」が与えられていないというアドヴァンテージがある。未来の科学を扱った文学であれば、つい私たちは文学が想像した百年後と、実際の百年後の科学という「正解」を比較しがちだ。だが幸いにして、人類はいまだ宇宙人に会ってはいない。だからある時代に支配的だった宇宙人表象が別のそれへと変化していったとしても、それは科学の与えた「正解」に引きずられた結果であるとは考えにくい。ある時代の思考の規範とは、客観的な現実によつてだけ説明されるものではないというのがここでの前提であり（そのこと自体は現在では常識的な発想だろう）、「事実」によつて説明されにくい——といつて、もちろん「事実」と無関係というのでもない——宇宙人表象は、やはり特権的なテーマなのである。

またもう一つ、対象とするのが現代ではなく、数百年以上の過去でもなくて、現在と明確に連続していながら、かつ確実に終わった時代であるとも感じられる、そのような時代であることにもメリットがあるだろう。ある時代に共有されていた課題あるいは夢のようなものがあるとして、それが何だったかをいえるのは、当然ながらその時代が終わってからのことだ。逆にその課題や夢が私たち自身と関係のあるものと感じられるためには、終わったばかりの時代を取り上げるの

は都合がよい。もちろん一九世紀後半をそのような時代と感じるのは、この文章の書き手が近現代フランス語圏の文学を研究しており、第二帝政期を近代の起点と捉える見方を一つの常識として受け入れてきたからである。その意味でなら、結局これは偶然の選択にすぎないともいえる。だが私たちにとつての同時代がはじまったように見える場所の一つにおいて、その時代から逸脱してしまつたものたちについて思考することは、私たちが多少とも自らと異なつた何ものかになる可能性を、開示してくれるかもしれない。

あるいはさらに踏みこんで、次のことをつけ加えてもいい。この文章は一人のシュルレアリスム研究者によつて書かれたものである。それはしかもこの両大戦間の文学・芸術運動が、時代を乗り越えようとした「前衛」ではなく、時代の問いをいったんは括弧に入れることによつて、あるいは忘れることによつて何が可能になるかを実験した運動であると、そのように考える書き手によつて書かれている。自らの時代の必然的な問いから逃走することはいかにして可能か、あるいはそもそも逃走する方法はあるのかという問いに対し、なんらかのヒントを与えてくれる人々に、私たちは問いかけてみたい。前衛でもアンダーグラウンドでもアウトサイダーでもなしに（つまりなんらかの基準に対し、その向こう側に踏み出したり、その外に押し出されてしまつたりしたのではなく）、今この場で自らを拘束する磁場から逃れ去るという選択。そんなことは本当に可能だろうか。可能だとすればそれは当事者に対していかに到来し、何をもたらしただのか。それがこの書物のテーマである。

だがまた単純に、終わってしまったある時代に視線を注ぎ、メイン・ストリームを作り出した思考と同じだけの強度をもちながら、それに抵抗するのでもそれを乗り越えようとするのでもなくて、誰も気づかないうちにそこから逸脱してしまったような思考、そうした奇妙な思考に問いかけるのは、大きな喜びに満ちた行為だと明言しておきたい。そこにはおそろく、のしかかる重力から私たちをほんの一瞬解放してくれる、反重力装置のような何かがある。これは一種の思想史研究ではあるが、あくまで一般化に抵抗するものに定位する試みでもある。そこから直接私たちが使える技法のようなものを引き出せる事例ではないとしても（なぜならそれが有効であった時代は終わっているのだから）、彼ら／彼女らが存在しえたという事実そのものが、すでにして一つの救いであるような、そんな人々がいる。それらの書き手、語り手が残した痕跡をたどりながら、そこに見出される奇妙な異星人表象に、まずは深く眩惑されてみたい。

すでに予告したとおり、最初の章では一九世紀ヨーロッパの異星人表象とそれが孕んでいた構造的な矛盾を素描しておこう。続く四つの章では四組五人の登場人物を取り上げるが、社会的なステイタスからしても、文学史的・思想的な位置づけからしても、ほとんどなんの共通点もない顔ぶれである。先例も直接の後続例もまったく存在しない予言的な「SF小説」を書いたが、その後まったく忘れ去られていた作家Ⅱ医師、高踏派と象徴主義をつなぐ詩人という文学史的な評価は確立しているし、エジソンより早く蓄音機の原理を考え出した発明家という称号を与えられてもいるが、その仕事の意味を十分には理解されないままにとどまっている詩人Ⅱ発明家、生



涯の半分を牢獄のなかで生き、七〇歳近くにしてふたたびつながれた独房のなかで科学書を読みふけりつつ、異様な宇宙論を作り上げる一九世紀フランス最大の革命家、フラマリオンの示唆した火星の人間たちとの交信を実現したという自らの真実を、一人の心理学者に信じさせようとした。だひたすらに願ひ続けた霊媒。彼ら／彼女らはみな、科学と文学あるいは思想の出会い地点に立ちながら、それら二つを結びあわせることを課題とした同時代の人々をしり目に、そんな課題などはじめから存在しないかのように振る舞う。SF前史のノイズとしての不可思議な声に、できる限り近い場所から耳を傾けてみることにしよう。